

## 6. 乳幼児をもつ母親の子育ての悩みにおける 援助要請を促進させる要因に関する研究

○八重樫 陽子（社会福祉法人愛星会 やまばと相談支援センター）  
生 巢 晋（社会福祉法人愛星会 やまばと相談支援センター）

### 【研究目的】

現在、子育てにおけるサービスは増加傾向にあるが、乳幼児をもつ母親は孤立した状況に陥りやすく、育児ストレスによる虐待など深刻な問題が生じている。母親が困った時に必要な支援を求めることは有効な対処方法であり、支援の充実とともに支援を求められるようにするにはどうしたらよいか検討することも重要である。よって、本研究は母親の支援の要請を促進させるための有効な要因を検討することを目的とする。

### 【研究の必要性】

援助要請の主要な促進・抑制要因については、これまでの研究において整理されてきており[1]、母親の援助要請に関する研究においても母親のアタッチメントとの関連を検討した研究はあるが[2]、多くはない。アタッチメントは、特定の個体との近接関係を求め、維持しようとする傾向、またその結果、確立される情緒的な絆のことである[3]。アタッチメントのスタイルには、いくつか分類方法があり[4]、安定型といわれるものとそれ以外の不安定な型のものがあり、内在化されたアタッチメントのスタイルはある程度の時間的な安定性を持つとされている[5]。一方で、アタッチメントは新たな対象との関係性が重要になることにより変容が可能なことも想定されており[3]、大きなライフイベントはアタッチメントのスタイルが変容する契機となりやすく[6]、身近な他者との信頼関係や社会的サポートなどがアタッチメントのスタイルを変容させる要因となる可能性がある。しかしながら、すべての母親が身近な他者との関係や社会的サポートを上手に求めたり受け入れたりできれば良いがその形態は個人によって様々であり、自分だけでは解決が難しい問題について他者に援助を求める援助要請のスタイルにおいては、アタッチメントのスタイルによって傾向が異なることが示されている[7]。そこで、出産とそれに続く育児という大きなライフイベントを迎えている乳幼児をもつ母親を対象に調査研究をおこない、援助要請を促進させるための有効な要因をアタッチメントのスタイルと関連させて検討する。

### 【研究計画】

#### (1) 対象

地域の乳幼児健診に参加する母親及び、幼稚園・保育所に通う乳幼児の母親を対象とする。回答は無記名であり、封筒に入れられた質問紙および返信用封筒を保健師または幼稚園・保育所を通して配布し、郵送にて回収する。研究の趣旨・内容、匿名性の保障等については文書にて明示し、返送をもって同意を得たものとする。

(2) 方法

①質問事項：フェイスシートにて、母親の年齢、職業、同居家族、子どもの人数・年齢・性別を尋ねる。②アタッチメントスタイルの評価：一般他者版愛着スタイル尺度[8]（下位尺度「親密性の回避」「見捨てられ不安」）を用いる。本研究では、「親密性の回避」「見捨てられ不安」をそれぞれ低群・中群・高群に分けて分析を実施する。③母親の援助要請の評定：援助要請スタイル尺度[9]（下位尺度「援助要請回避型」「援助要請過剰型」「援助要請自立型」）を用いる。これは、実際の援助要請の行動パターンを予測するものとして考えられており、アタッチメントスタイルによって援助要請スタイルの傾向が異なることが明らかになっている[7]。④子育てにおける援助要請の評定：上記の援助要請スタイル尺度[9]を一部変更し、子育ての悩みにおける援助要請スタイルを測定する。⑤育児ストレスの評定：育児不安尺度[10]（下位尺度「中核的育児不安」「育児感情」「育児時間」）を用いる。⑥ソーシャル・サポートの評定：育児ソーシャル・サポート尺度[10]（下位尺度「精神的サポート」「居場所作り」「育児ヘルプ」）を用いる。なお、質問項目について‘夫’の記述を‘家族’に変更して使用する。⑦その他：身近な人や専門機関に助けを求めようとする際に、助けを求めにくいところを自由記述で求める。

【実施内容・結果】

(1) 対象者

乳幼児健診に参加する母親及び、幼稚園・保育所に通う乳幼児の母親 1357 人を対象に実施し、487 名から回答を得た。回収率は 36%であった。

(2) 結果

各尺度については因子分析をおこない、尺度の分類は先行研究と同様に因子名をつけて分類した [8][9][10]。

①アタッチメントスタイルと援助要請スタイルの間に差があるのか検討するために、アタッチメントスタイルである「親密性の回避」および「見捨てられ不安」を独立変数とし、子についての各援助要請スタイル、親自身の各援助要請スタイルを従属変数とした 1 要因分散分析をおこなった（表 1、表 2）。

表 1 「親密性の回避」の分散分析

	低 群		中 群		高 群		分散分析 F 値	多重比較 (群)
	M	SD	M	SD	M	SD		
援助要請回避型(子)	1.72	.76	2.30	1.11	3.01	1.37	48.58***	低<中<高
援助要請回避型(親)	1.98	.93	2.53	1.09	3.28	1.41	44.84***	低<中<高
援助要請過剰型(子)	5.10	1.29	4.45	1.28	3.53	1.49	48.36***	高<中<低
援助要請過剰型(親)	5.09	1.09	4.32	1.23	3.24	1.38	77.61***	高<中<低
援助要請自立型(子)	3.73	1.17	3.92	1.05	4.39	1.25	12.33***	低<中<高
援助要請自立型(親)	3.92	1.26	4.06	1.09	4.46	1.24	7.60**	低<中<高

(M=平均値、SD=標準偏差、\*\*p<.01、\*\*\*p<.001)

表 2 「見捨てられ不安」の分散分析

	低 群		中 群		高 群		分散分析 F 値	多重比較 (群)
	M	SD	M	SD	M	SD		
援助要請回避型(子)	2.03	1.07	2.33	1.14	2.67	1.35	9.57***	低<中<高
援助要請回避型(親)	2.20	1.17	2.67	1.17	2.87	1.35	12.11***	低<中<高
援助要請過剰型(子)	4.24	1.50	4.37	1.45	4.65	1.45	2.97	
援助要請過剰型(親)	4.18	1.48	4.18	1.34	4.44	1.48	1.54	
援助要請自立型(子)	3.96	1.28	4.01	1.10	3.97	1.17	0.08	
援助要請自立型(親)	4.03	1.40	4.17	1.02	4.15	1.21	0.67	

「親密性の回避」（表 1）においては、すべての変数において有意な差がみられた。「援助要請回避型」は、『問題の程度にかかわらず、一貫して援助を要請しない傾向』[9]とされており、「援助要請回避型」に着目してみると、「親密性の回避」の値が高ければ「援助要請回避型」も高い値を示した。「見捨てられ不安」（表 2）においても「援助要請回避型」に有意な差がみられ、「親密性の回避」の値が高ければ「援助要請回避型」も高い値を示した。

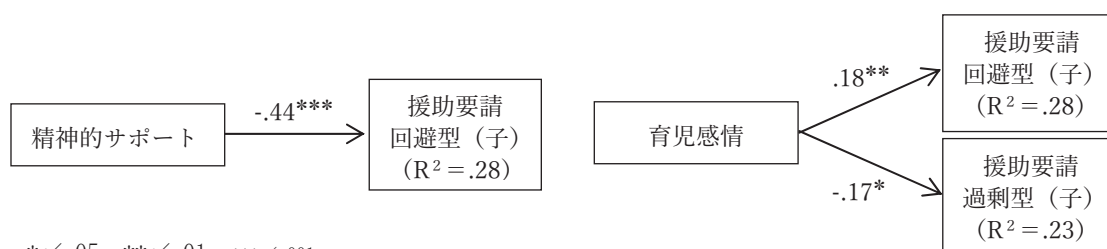
②育児不安やサポートが援助要請スタイルに与える影響を検討するために、援助要請スタイルごとに重回帰分析をおこなった（表 3）。

表 3 重回帰分析

	援助要請回避型 (子) $\beta$	援助要請過剰型 (子) $\beta$	援助要請自立型 (子) $\beta$
精神的サポート	-.44***	.48***	-.24**
居場所作り	.00	-.02	-.01
育児ヘルプ	.05	-.11*	-.02
中核的育児不安	-.03	.26**	-.09
育児感情	.18**	-.17*	-.05
育児時間	.06	-.05	.16**
$R^2$	.28***	.23***	.08***

\* $p < .05$ 、\*\* $p < .01$ 、\*\*\* $p < .001$

「援助要請回避型」に着目してみると、「精神的サポート」との間に負の影響がみられた。「精神的サポート」の質問紙項目は、「子育てをするなかで感じたことを安心して話すことができる人がいる」「家族はよく理解してくれている」といった内容だった。また、「育児感情」の間に正の影響がみられた。「育児感情」の質問紙項目は、「子どもをわずらわしいと思うことがある」「子どもを育てることが負担に感じる」といった内容だった。また、「育児感情」は、「援助要請過剰型」との間に負の影響がみられた。「援助要請過剰型」は、『容易に援助を要請する傾向』[9]とされる。



\* $p < .05$ 、\*\* $p < .01$ 、\*\*\* $p < .001$

③質問紙の自由記述について、「親密性の回避」及び「見捨てられ不安」の高群の回答を多かった順に整理したところ、【身近な人に助けを求めにくい、相談しにくいと思うところ】では、「相手への遠慮」（26%）、「自己開示の抵抗」（17%）、「解決の期待の低さ」（17%）となった。また【相談機関に助けを求めにくい、相談しにくいと思うところ】では、「利用しづらさ」（54%）、「秘密漏洩の心配」（23%）、「敷居の高さ」（19%）という結果となった。

### 【考察と今後の課題】

今回の研究は、母親の支援の要請を促進させるための有効な要因を検討するものであった。結果①では、アタッチメントのスタイルである「親密性の回避」の値が高ければ高いほど、また「見捨てられ不安」の値が高ければ高いほど、「援助要請回避型」も高い傾向を示しており、アタッチメントのスタイルによっては援助要請が容易ではないものがあることが示唆された。これは、永井(2013b)によって述べられているように、アタッチメントスタイルによって援助要請スタイルに傾向があることが明らかになった。「援助要請回避型」に着目して結果②をみると、「援助要請回避型」の人であっても、良き理解者や安心して話せる相談相手の存在などの「精神的サポート」があれば、支援を求められる可能性が示唆された。一方で、「子どもをわずらわしいと思うことがある」「子どもを育てることが負担に感じる」といった「育児感情」は、援助要請を抑制し、「援助要請過剰型」の人でも、支援の求めを躊躇してしまう要因となり得ることがあり、「援助要請回避型」の人は、否定的な「育児感情」を抱くことで更に援助を求められなくなっていることが示唆された。結果③の多くの回答においても、否定的な育児感情を抱いている際に援助要請を躊躇する母親の心境を反映しているものと推測される。わずらわしさや負担感は、育児ストレスであり、それを感じることで更に援助を求められないとすれば、母親は強いストレスに苦しむことが推測される。

上記結果から、地域の子育て支援においても、否定的な育児感情を先ずは受けとめ、母親の辛さに寄り添う関わりが大切であると考えられる。安心して話すことができる場の提供により、次に困った時にも支援を求めていこうという気持ちになれるものと推測される。そうした継続的な関わりのおかげによって、母親が他者に支援を求めたり、支援を受け入れられる関係が少しずつ構築され、徐々に個人の援助要請のあり方に変容が生じ、それによってアタッチメントのスタイルも変化する可能性が生まれてくるものと考えられる。なお、自由記述において「利用しづらさ」に多くの回答がよせられている。活動内容や施設環境の随時検討とともに、利用してみようと感じてもらえるように活動内容や利用方法などの伝え方についても順次検討する必要がある。また、国の政策である乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）のように、希望の有り無しに関係なく母親と関わりがもてるような体制は、援助を求めることが困難な母親が支援へたどり着けるために有意義と推測される。今後、関係機関に提言したいと考える。

今後の課題として、今回の研究は山間地域に居住する母親を対象にしており、交通の利便性や施設の立地状況などを考えると使用する尺度を地域特性に合ったものになるように検討する必要があるだろう。また、対象人数に限りがあるため今回は母親の回答をまとめた結果となっているが、子どもの年齢や人数ごとに分けて分析した場合にはより詳細な結果が得られるものと推測されるので、今回の結果を踏まえて再考したい。また、自由記述の詳細な分析や、援助要請の要因と考えられる自尊感情など他の要因についても検討したい。

【参考文献】

- [1]竹ヶ原靖子 2014 援助要請行動の研究動向と今後の展望-援助要請者と援助者の相互作用の観点から- 東北大学大学院教育学研究科研究年報 62(2), 167-184
- [2]藤岡真紀・清水寿代 2014 乳幼児をもつ母親の専門家に対する被援助志向性に影響を与える要因の検討 母親のIWMと援助要請対象との心理的距離に着目して 日本心理学会第78回大会 京都
- [3]Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books. (ボウルビー, J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳) (1976). 母子関係の理論 I : 愛着行動 岩崎学術出版社)
- [4] 遠藤利彦 2010 アタッチメント理論の現在 - 生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う - 東京大学大学院教育学研究科 49, 150-161.
- [5] Fraley, R. C. (2002). Attachment stability from infancy to adulthood: Meta-analysis and dynamic modeling of developmental mechanisms. Personality and Social Psychology Review, 6, 123-151.
- [6] Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. Child Development, 71(3), 684-689.
- [7] 永井智 2013b 愛着スタイルに基いた援助要請および悩み方の個人差の検討 日本教育心理学会総会発表論文集 55, 466-466
- [8] 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究
- [9] 永井智 2013a 援助要請スタイル尺度の作成-縦断調査による実際の援助要請行動との関連から- 教育心理学研究 61, 44-55
- [10]手島聖子・原口雅浩 2003 乳幼児健康診査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要 1, 15-27

【経費使途明細】

使 途	金 額
消耗品費（用紙、封筒、）	23,937 円
印刷費（インク代）	31,161 円
通信費（電話、切手）	137,500 円
交通費（研究説明、質問紙配布）	24,861 円
人件費 3 名（統計処理・自由記述分類）	60,000 円
参考図書	26,240 円
合 計	303,699 円
大同生命厚生事業団助成金	300,000 円